

「出雲には独自の文化が繁栄し

増山雄三

「国生み」「黄泉国」「天岩戸」に続く、島根の出雲地方に伝わっている、「素戔鳴命（スナミコト）」と八岐大蛇（ヤマタノオロチ）の神話である。

絶好の口である」といふものである

記にもあるが、日本書紀の「八岐大蛇」といって、本文にも「高志之八俣遠呂智、年毎に來たり」とあつて、大蛇は古代日本の地方である高志（こし）から來たとされるが、名稱本来の意味は「山神または水神」であり、これを祀る民間信仰もある。島根県出雲地方の南部は、中国山地の山々に抱かれ、のどかな農村風景が広がる場所だが、この地方最大の河川である、長さ百五十三キロの「斐伊川」の上流に位置している。その一角である、同県雲南市の山あいに須我神社があり、その境内には「日本初之宮」という石碑を据えていて、NPO法人出雲学研究所副理事長で七十才になる本間恵美子さんは、「スサノオノミコトが、妻のクシイナダヒメと住んだ地として、日本書紀に出でています」というが、石碑の文言は、地上るへ出雲の清地～とは、ここだつたと伝承されていました」といふが、石碑の文言は、地上で嘗まれた神々の住まいの噶矢だつた事を意

味している、と付け加えてくれた。

日本書紀の神話では、先に話した様に、ス

サノオは天上の田を壊すなどの乱暴な振舞で

神々の怒りを買い、地上に追放され、出雲の

ヘ簸（ひ）の川上へに降り立つが、それは斐

伊川のほとりを指すといわれている。

そして、スサノオはそこで、若い娘を食べ

てしまふ大蛇のヤマタノオロチにおびえる、

老夫婦とその娘のクシイナダヒメと出会い、

娘を救つて結婚しようと決心し、八つの頭と

尾を持ち、赤い鬼灯のような眼をもつたオロ

チを、八つの酒桶を準備して迎え討つ、とい

うことになるのだ。

書記の本文では、「果して大蛇あり。酒を

る。時に素戔鳴尊、乃ち帶かせる十握剣（と

得るに及至り、頭各一の槽を飲み、酔ひて睡

つかのつるぎ）を抜き、寸に其の蛇を斬りた

まふ」とあるが、つまりそれは、「はたして

大蛇がやつてきた。酒を見つけると頭を各々

一つずつの酒桶に入れて飲み、酔つて眠つて

しまつた。その時、素戔鳴尊は身に帯びておられた十握剣を抜いて、すたずたにその大蛇をお斬りになつた」ということになる。

斯基ひとふりの剣がでてきたが、それがいわゆる「草薙剣」と呼ばれるもので、その剣をスサノオがオロチを倒し、尾を切り裂いたとき、ひとふりの剣がでてきたが、それがいわゆる「草薙剣」と呼ばれるもので、その剣を天上の神に捧げ、クシイナダヒメと結ばれるが、スサノオはその時へや雲たつ、出雲八重垣が、妻ごめに八重垣作る、その八重垣ゑと歌うが、や雲たつとは、雲が盛んに湧くさまを表す枕詞で、妻とこもるために、幾重もの垣を作つたという祝歌だ。

ところで、このように勇壮で、誇らしげな物語は、どんな背景から生まれたのかという事を、歴史学者の上田京大名誉教授は、著書の「出雲の神話」の中で、クシイナダヒメの名が、稻田のタマシイを示す事や、ヤマタノオロチが住む、水面に映る空がうごめき大蛇の様に見える、斐伊川上流の「天が淵」が、しばしば氾濫した河川の神格化だと見られる

と述べ、続いてこう書く。

続いてこう書く。

ANSWER

1

「妻ごもりの歓喜は、荒れくるう水を治め

た古代人の勝利のことあげであり、春から秋

にかけての生産の勞苦のはてに、もたされた

みのりの凱歌でもある一とハハ、それば、台

「おまえは、おまえの本領を出さないといけないんだ。」

方には雪の間生沢に桜さむか花言

日本書記は、天武天皇（六三一～六八六）

田文書緑は天武天皇ノ元三ノ元ノ元ノ

の命て縊纂か如まに十二の年は所立じたる

のたかひで作らねか史書は古作出雲の

風土に深く紹ひ付いた詠辺かと云してこの

ように盛り込まれていたかどしが理由を先

の出雲学研究所の本間さんは、一曰本書紹を

読むと天武天皇が壬申の乱で政権を握る際

に  
出雲田猶といふ人物が活躍しています。

そうした出雲系の有力者たちが大和にいて

出雲ではこんな話をみると伝えたのではない

でしょか」と推しはかる。

のちに、スサノオとヒメは「須我神社」に

一  
緒  
に  
住  
み  
、  
二  
人  
の  
間  
に  
は  
一  
大  
己  
貴  
神  
(オ  
オ



を示す祭器で、一つの遺跡からの出土例では全国でも最多で、方形の墳丘の四隅が、ヒトデのように突き出しているスタイルで、墓が造られているのが特徴である。

こうして大和の王権が伸長するなか、出雲もその支配下に入つたが、古墳時代の六世紀頃になると、地元で発掘された「砂鉄」を木炭の火で製錬する、いわゆる「たら製鉄」が始まつていて、出雲近郷の山間部では、それが現れらの関連遺跡も数多く見つかつていて、この製鉄法は近世まで盛んに行われ、それが現在でも継承されている。

ちなみに、物理学者の寺田寅彦は、ヤマタノオロチの正体は、溶岩流を連想させる、たたら製鉄で炉から流れ出した「銑鉄」を表すとし、スサノオがそれを討伐する話は、この地を支配する豪族が、婚姻によつて製鉄をす  
る一族を支配下に治め、鉄剣を献上させたのではなかろうか、と推定している。